

2. 「いい時代」を生きるために 平田オリザ

「いったい、この踊りには、なんの意味さあるんだ！」

もう十五年以上前になるが、津軽半島の先端の小さな漁村に赴き、公民館で前衛舞踏を踊るといふ酔狂につきあったことがある。

観客は地元の漁師さん達とその家族、乳飲み子から八十代のおじいさん、おばあさんまで。銘々、公民館の畳の上に、正座をしたり寝そべったりしながら、大音量の都はるみにのって踊る白塗りのダンサーを眺めるのだ。

そのうちに、客席にいた小学生が、すくっと立ち上がり、いささか興奮した面持ちで、

「いったい、この踊りには、なんの意味さあるんだ！」

と絶叫した。

…意味

問いかけ…
芸術の本質と存在意義…

私は、この、「なんの意味があるのか?」という問いかけにこそ芸術の本質があり、その存在意義もあると考えている。

芸術家…

日常生活の中では、なかなか経験できない魂を揺さぶる行為にこそ芸術の価値がある。私たち芸術家は、人々が、普段の社会生活や経済行為の中で、忘れてしまったり、忘れたふりをしている事柄に光を当て、それを形や音にすることで、人生に異なった視点を与えることができる。こうして私たちは、ニーチェやサルトルを読まない人々にも、「人間存在には意味はないのかもしれない」という問いかけを、身体を通じて直接的に持たせることさえもできる。

芸術文化振興・メセナ…

だが一方で、この仕事は、人間の精神の暗闇を見つめ続ける作業でもある。このことは誰もがができることではなく、また狂気を伴ったり、社会生活を否定しなければならないような辛い局面に置かれる可能性もある厳しい仕事でもある。そして、このような事柄は、社会や人間にとって、どうしても必要ではあるが、皆が全うすることのできる職種ではないので、ある程度の保護や育成を公のお金を使って進めていこうというのが、欧米における芸術文化振興やメセナの基本的な考え方だろう。

これは、おそらくプロテスタンティズムの思想的な背景が強く影響しているのではないかと私は考えている。プロテスタンティズムとは要するに、人間は本当は神様のことを四六時中考えていなければならないのだけれど、そんなことでは都市の生活は営めないなので、週に一回、二時間だけ教会に行くことにしよう、そして他の時間は仕事に励み、神のことについて考えるのは牧師さんに任せておこうという考え方だろう。同じように、本来、人は、人間とは何か、世界とは何か、死とは何かといった事柄を不断に考え、さらにはそれを表現として形にするべきなのだが、生活のためにはそうも言っていられないので、特殊な目や耳を持って、それを色や形や声にできる芸術家たちに、その作業の一翼を担ってもらい、人々はその成果物を享受しようというのが、欧米における芸術支援の根幹を支える理念だろうと私は考えている。

公的支援…

日本でも、1990年前後から、現代芸術への公的支援が本格的に始まった。科学技術予算に比べれば微々たるものだが、しかしそれまでゼロに等しかったところに、億単位の金が流れ込んできたわけだから、その根拠、あるいは使い道を巡って、にわかに議論が活発化した。

しかし、その議論の多くは、私から見ると、「芸術がこれにも役立つ、あれにも役立つ」といった用途論に過ぎず、その本質を問う論は少な

かったように思う。

それまで見たこともないような巨額の助成金をもらったある老舗劇団が、「公的な仕事をしなければならぬから、これからは劇団員で、毎朝駅前の掃除をしよう」と話し合ったという笑い話さえ残っている。

…助成金

一見、世の中の役に立たないように見える…

科学についても、同様のことは言えないか？

…科学

科学は技術と結びつき、現世の役に立つ事柄が多い。それは確かなことなのだが、だからそれが公的支援の根拠になるのだと考えると、足下をすくわれる可能性はないだろうか。いや、昨今の成果主義、競争的資金の獲得といったお題目は、すでに足下をすくわれつつある現象であって、このままでは、技術に結びつかない科学は無用であり、さらに技術に結びつくものは民間（あるいは民間からの資金）でということになっていくだろう。

…成果主義

…競争的資金の獲得

だから科学者は、先端研究とか基礎研究とか、曖昧で分かりにくい用語を使って既得権益を守っているだけではダメだ。科学が、いかに人々を驚かせ、魂を揺さぶり、既成の世界観を転換させ、未来を予感させるかを示さなくてはならない。そこには、ある種の演出も必要であり、デザインも必要だろう。

と、このように考えていくと、我々 CSCD の存在意義も、自ずと明らかになっていくのではないだろうか。

医者や科学者や弁護士のタマゴたちに、演劇を通じてコミュニケーション能力をつけて欲しいというのが大学側からの私への要請であり、私もそのことに関しては、できる限りの努力をしたいと思う。

…コミュニケーション能力

しかし、ここで言うコミュニケーション能力が、例えば、科研費を一円でも多く取ってこられるようなプレゼンテーション能力のことを指すのなら、なにも私が出て行かなくても、そのお手伝いくらいはするけれども、学部できちんと演習をしてくださいということで済む。

…プレゼンテーション能力

CSCD が目指すのは、そういった技術としてのコミュニケーション能力やデザイン力ではない。

「いかに科研費を取ってくるか」

ではなく、

「この研究が、いかに世の中の役に立つか」

知的体力と創造性…

でもなく、

「なぜ私たちは、税金を使って、一見、世の中の役に立たないように見える研究をし続けていいのか。その意義は何か？」

ということ、徹底的に考え抜く、そして、それを言葉や色や形にして世間に問う、それだけの知的体力と創造性のある学生を養成することこそが、私たちのミッションだろう。

価値観を変貌させ、世界観を更新する

「魂を揺さぶる」「新しい世界観」といった、いささか抽象的な言葉を書き連ねたので、残りの紙幅で、このことを少しだけ具体的に考えたいと思う。

おそらく世間一般では、科学は真実を発見してくれるものだと思われているようだ。そしてその発見された真実は、たまに間違ふことはあっても、たいていが絶対不変であるとも考えられている。

しかし、本当は、科学が（あるいは芸術が）できることは、せいぜい世界観の更新であって、私たちは、決して真実にたどり着くことはない。

新しいリアル…

私は、芸術も科学も、その基本的な役割は、「新しいリアル」を提示すること、それによる世界観の更新にあると考えている。「新しいリアル」の提示とは、要するに、「あなたたち世間は、世界や人間のことを、そのように丸く収めてお考えでしょうが、そしてその方が、いま生きるのにはご都合がいいのでしょうか、本当の世界はそんな形をしていませんよ。本当の世界や人間の姿というのはこうですよ」ということを力強く指し示すことだ。

宇宙が回っているのではなく、地球が回っているのだということを訴えていく。宇宙が回ってしようが、地球が回ってしようが、海外旅行でもしない限り、人間の日常生活にはどちらでもいいことだ。それは、冥王星が惑星か矮惑星かということが、私たちの生活になんの影響も及ぼさないのと同様に。

さらに、少なくとも当時のキリスト教世界の支配層からすれば、宇宙が回ってくれた方が、あきらかに都合がよかったのであり、ガリレオ・ガリレイが迷惑がられたのも無理はない。世間から迷惑がられるくらいでないと、科学も芸術も価値がないということだ。

しかし、ガリレオ・ガリレイの提示した新しいリアルは、少しずつ人間

の価値観を変貌させ、世界観を更新していく。

私は、拙作『東京ノート』の中で、フェルメールがカメラオブスクーラを使って絵を描いていたという話題に関連して、美術館の学芸員に、次のような台詞を語らせている。

「一七世紀っていうのは、まあ近代の始まりですからね、ガリレオの望遠鏡だとかね、顕微鏡だとかね、そうやってレンズを使って、とにかく、見えないものまで全部見るようになったわけですよ。小さいものも、宇宙のことも。まあ近代っていうのは、そこから始まったわけですよ。レンズを通して、ものを見ると。客観的に見る。それは神の視点とは別のものですよね。そういう違いがある。で、まあ、どうも、そのレンズっていうのがね、オランダを中心に発達したらしいんですね、当時。オランダの哲学者スピノザはレンズを磨きながら宇宙と神について思索を巡らしたんですよ。こーやって、レンズを磨いて、レンズを覗くと、世界が全部見えるような、そんな気になれた、まあいい時代だったわけですね」

ちなみに、ここで言う「いい時代」とは、アランの『デカルト』の冒頭、「人はいい時代に生きた」という一節からの援用である。

科学が、あるいは科学者が、その発見を、人々の世界観の更新へと直接的に結びつけられる時代は「いい時代」である。

いい時代に生きられるかどうかは、科学者個々人の努力だけではどうしようもない面がある。しかし、CSCDの理想は、やはりこのような「いい時代」を現出させることにあるだろう。

サービスを提供する

とは言え、残念なことに、私たちを取り巻く状況は、それほど生やさしいものではない。その生やさしくなさ加減は、前文で、小林さんが指摘したとおりである。

何故そうなるのか？

おそらく、科学は、技術と結びついて専門化が進むと、そこに既得権益が派生しやすい。そして、その権益を守ろうとする有形無形の動きが生じる。

それはやがて、ある種のイデオロギーや、フェティシズムやノスタルジーとなって、権益の保護を正当化する力が働く。

いまの日本で、このフェティシズムやノスタルジーの最たるものは、「も

…価値観の変貌

…世界観の更新

…専門化

…フェティシズム

…ノスタルジー

のつくり」という言葉だろう。職人の匠の技も、大量生産の工業技術もごっちゃになって、「ものつくり」とひとくくりにされるのは、プロジェクトXに象徴されるような工業立国へのノスタルジー、かつて世界を席卷した様々な日本製品に対するフェティシズムの所産に他ならない。

しかし、すでに日本の労働人口の過半は、第三次産業に従事しており、工業立国に戻ることは不可能なのだ。工業生産において、中国や、これから台頭するであろうインドや東南アジア諸国と、まともにぶつかり合って勝てるわけがない。「いやいや先端技術なら、まだまだ追いつかれない」とか、「アジアの他の国々は、まだまだ政情不安だから」といろいろな理屈をつけてみるが、先端技術は韓国、台湾に追いつかれつつあるし、韓国はすでに、政権交代もある日本より民主的な国になっているではないか。もちろん、日本人の「手先の器用さ」「勤勉さ」などが神話に過ぎないことは、すでに明白である。

戦前、農業国から工業国への急速な転換期には、都市への急速な人口流入が起これ、福祉政策など皆無に等しかったこの時代に、農村社会は瞬間に崩壊した。しかし、当時、右も左も、二千年にわたって培ってきた農業社会へのノスタルジーを捨てきれずに、「農を守れ」というスローガンを掲げた様々な運動や施策が展開された。

だが、結局、そのような農村の不満は解消できず、それを大陸へと転嫁した結果、私たち日本人は、近隣の国々に大きな迷惑をかけてしまった。はたして、その愚をもう一度繰り返すのか。

アジア… 私たちが真剣に考えるべきことは、これから豊になって行くであろうアジアの人々に、どれだけ質の高いサービスを提供できるかだ。この点ならば、あと二十年や三十年は競争力を維持できる。それより先は、きっと国家の競争力なんて言葉が意味をなさない時代が来るだろうと、楽観的な期待をもつしかない。

サービス… そして、おそらく、この「サービス」という点に、CSCDのもう一つの大きな役割がある。

私は先に、

「この研究が、いかに世の中の役に立つか」

を語る技術を伝えることがCSCDの目的ではないと書いた。しかし、それをさらに細分化し、厳密に言うならば、以下のようなものかもしれない。

「この研究が、いかに世の中の役に立つか」

に興味、関心はない。しかし、

「この研究が、どのように応用されれば、それが人々にとっての幸せにつながり、また安心につながるか」

については、科学者も心を砕く責務があるだろう。そして、そのことを考え、表明できる科学者を育てることも CSCD の役割となるだろう。

…科学者の責務

ここでいう「サービス」とは、身も蓋もない言い方をすれば、「何を作るか」から、「いかに売るか」への転換なのだが、しかしそれを、もう少しだけオブラートに包んで表現するなら、「その製品がどう使われるかに思いを馳せる」ということだろう。

製品開発者が、はるか遠い最終消費者の幸せに思いを馳せること。理論物理学者が、百年後の核戦争の被災者に思いを馳せること。

繰り返しになるが、それは、既成のイデオロギーや、過去の成功へのノスタルジーにとらわれることなく、確固とした独自の世界観を持ち、多様な他者に対しては強靱なまでの柔軟性を持つということだ。

もしもそうであるならば、そのように、日本社会と世界が変容を求めているならば、特殊な目や耳を持ち、その感じ取った世界を色や形や声にする能力を持った芸術家が、科学者たちと机を並べている CSCD という場所には、多少の存在意義があると思われる。もちろん、机を並べているだけでは、なんの意味もないのだけれど。